

# 「アレルギーの子どもが直面する地域と暮らしの課題研究」 －防災意識と日常生活行動アンケート調査報告－

## ① 調査目的

「子育て世代の親子の立ち寄り先や防災意識」「慢性疾患(特に食物アレルギー、喘息、アトピー性皮膚炎)がある子どもたちのいる家庭では、災害発生時にどのような行動をとり、どんな不安を感じているのか」を知りたいと考えた。調査結果を参照しながら、災害時において「患者のための支援物資の搬送先」や「体制を整えておくといよい場所」についての検討材料としたい。

## ② 調査対象

- ・医療機関に通院する、アレルギー性疾患がある小児と、かぜ等の疾患で通院した一般の小児を対象に、医師の協力を得て病院にてアンケート用紙を配布した。
- ・複数の患者団体に協力いただき、アレルギー性疾患のある人とない人を対象に同数配布した。
- ・アンケート配布対象地域を下記の①～③とした。
  - ①福島県・宮城県、福島県から山形県米沢市に県外避難している人
  - ②阪神・淡路大震災の折の被災地域の人
  - ③関東(1都6県と山梨県)

## ③ 調査方法

- ・アンケート配布期間 2012年8月1日～8月31日。
  - 協力依頼に応じてくださった病院での配布(アレルギー650通・非アレルギー620通)、協力団体の会員、会員と同数の非アレルギーの友人への配布(アレルギー611通・非アレルギー619通)。
- ・有効回答数 567通。回答者は女性(母親)96.6%、年齢は30代49%、40代37.7%、居住地域は、阪神地域39.9%、東北地域11.8%、関東地域40.7%

## ④ 調査結果

### I 施設の活用

「遊びに行く場所」について、児童公園・家の近くの公園 32.8%、自治会が行う行事(地域のお祭りなど)20.9%、商業施設(デパート内保育スペース)17.2%。児童館 10%。子育てスペース、公民館、コミュニティセンター、子育て支援センターの回答数は少なく 6%以下だった。

「子育てや健康に関する勉強会、親同士の交流イベントの参加」について、他群より多かったのは、非アレルギー群では保育園 23.2%、子育て支援センター12.5%。アレルギー群では図書館 20.4%、病院・クリニック 18.1%。全体を見ると、公民館、子育て支援センター、子育てスペースの回答が10%に満たず、保育園、幼稚園、図書館、病院が15%～20%で全体の約7割を占めた。

「子どもの健康や子育てについて困ったとき相談に行く場所」について、「病気の時」という設問ではなかったが、病院・クリニックの回答数が多い結果となった 59.3%。

### II 災害時の想定

「災害時に活用できる(活用したい)施設」は、学校 16%、病院 21.3%。病院を選択した理由は、「食物アレルギーの人の食料を手配してもらえないのではないか」「常備薬を手に入れたい」「とりあえず病院へ行く」「食料の備蓄があるのではないか」「とりあえず安心」という回答が多数を占めた。

保健所、保健センターの合計 16.9%。保育園、幼稚園をあわせると 13.4%。

東日本大震災でアレルギー用物資を搬送したときも、広域避難所にたどり着けなかった多くの人が、

保育園や幼稚園に避難している光景を目の当たりにした。大規模避難所が次々に統廃合されている時期も、保育園や幼稚園が避難場所として機能し続けたところもあった。なぜその場所が求められているのか、調べてみたいと感じた。

食料の備蓄をしている人は約 70%、災害に備えた常備薬の保管をしている人は約 50%だった。

避難所で子どもの病気や怪我に対応できる施設があるかどうか不安 25.7%、避難場所で子どもの病気や怪我の薬の入手ができるかどうか不安 23.7%、着替える場所やプライベートの空間があるかどうか不安 14.3%、家族が集まる避難場所が定まっていないことが不安 11.1%、避難場所は赤ちゃんがいられるかどうか、授乳・おむつ替えの施設があるかどうか 8.3%だった。その他 16.9%の自由記述には「食物アレルギーの人が食物を入手できるかどうか不安」「ほこり対策など何らかのアレルギー対策をしてほしい」などがあった。

東日本大震災においては、避難所への医師らの巡回診療の多くは内科医によるものであったため「皮膚科医に巡り合えないので、定期的に塗布しているステロイドを入手したい」という要望が当法人に多数寄せられた。甚大災害においては、病人や怪我人以外の人が病院に殺到することは避けなければならない。手立ての一つとしては、処方されている常備薬が必要な慢性疾患の患者らの支援をどのようにすべきか体制を整えておくべきと考える。

食物アレルギーの人が「病院に行けば何とかなる」と考える傾向が高かった。1995 年の阪神・淡路大震災の折、病院に搬送したアレルギー用物資が一番活用されていたため、当法人も東日本大震災では、当初病院に物資を搬送したが、連携はあまりうまくいかなかった。保健センターに搬送したのも、うまく機能したところとそうでないところがあった。病院や保健センターとの連携の在り方、病院以外の場所で患者が信頼して物資を取りに行ける場所はどこなのか、検討すべき課題である。これらの課題を多くの人にご理解いただき、ともに検討できる機会をとらえたい。

NPO 法人アトピッコ地球の子ネットワーク

「アレルギーの子どもが直面する地域と暮らしの課題研究」プロジェクト

E-mail:info@atopicco.org <http://www.atopicco.org/>